

(第97回) 歌舞伎「初春大歌舞伎」

1月20日(第二部) 歌舞伎座

コロナで明けコロナで暮れた憂鬱な一年を過ぎて迎えた令和3年はコロナ第三波感染爆発と再度の緊急事態宣言で始まりました。

初春大歌舞伎は、昨年11月と同様手指消毒と検温、座席は前後左右を空けたソーシャルディスタンスを守り、マスク着用、会話制限の徹底した防疫対策下の公演となり、いつもの新年の華やかさも無い、味気ない雰囲気でした。観客は11月より少なく二割程度の閑散とした客席、いつもより目に付く和服姿が、僅かにお正月を感じさせてくれる。11月は四部構成で各部1時間ほどの一幕公演でしたが、今回は三部構成で各部1時間ほどの演目二つから成る2時間ほどの公演となりました。1月20日第二部「夕霧名残の正月 由縁の月」と「仮名手本忠臣蔵 祇園一力茶屋の場」を楽しみました。恒例の鮮やかな緞帳の紹介、開演5分前のアナウンスに気持ちの高まりを覚え、さあ開演。

「夕霧名残の正月 由縁の月」

昨年11月に88歳で逝去した四世坂田藤十郎を偲ぶ追善公演で、子息である鴈治郎が藤十郎所縁の藤屋伊左衛門を、扇雀が扇屋夕霧を演じた。元禄時代の上方で初代坂田藤十郎によって完成された、やわらかで優美な演技を”和事”と呼び、江戸の初代市川團十郎によって創始された荒々しく豪快な演技の”荒事”と並び歌舞伎の本流を成した。

舞台は夕霧を抱えていた扇屋の座敷。遊女夕霧はふとした病が元でこの世を去り、今日は四十九日、形見の襦袢(うちかけ)を掛けて故人を偲んでいる。そこに大店の若旦那でありながら夕霧に

入れ揚げて金を湯水のごとく使って廓に通い詰め、怒った父親に勘当された藤屋伊左衛門(鴈治郎)が何も知らずに零落した姿で現れる。

「誠この世は飛鳥川 流れと人の行く末は 変わりて留まる事も無し」

お座敷に上がった伊左衛門の前に不思議なことに、夕霧(扇雀)が姿を現し、伊左衛門の傍らに寄り添う。



「花咲く廓の春なれば 今を盛りの桜花」

襦袢の背景が割れて見事な満開の桜の木、幸せに満ちた日々を舞に託して語り合う二人・・・「夏は蛍の夕涼み 伏屋の軒に見る月は 寄せる思いも増鏡」

しかし、それは伊左衛門が見た幻であったのか、夕霧は忽然と姿を消し、伊左衛門は夕霧の形見の襦袢を抱きしめる。

とても艶やかな舞踏劇でした。20分の休憩の後次の出し物が始まります。

「仮名手本忠臣蔵 祇園一力茶屋の場」

赤穂浪士の討ち入りを素材とした全十一段の人形浄瑠璃から歌舞伎に移入されたが、上演すれば大当たりすることから、江戸時代の漢方の妙薬に譬えて“芝居の独参湯（どくじんとう）”と呼ばれ、古今を通じての人気狂言となりました。

七段目「祇園一力茶屋の場」は、仇討を志す大星由良之助の苦悩と真意が明かされ、前半と後半では由良之助の見せる性根が異なるため、前半では廓で遊ぶ男の色気とおおらかさを、後半では仇討ちを志す忠臣であることを示す変わり身が見所ですが、今回はコロナ禍での時間制限の為前半を飛ばしていきなりクライマックスの演出で、息子の力弥の出番がない。



舞台は祇園町にある一力茶屋。塩冶判官（えんやはながん）が足利館松の間にて高師直（こうのもろのう）を斬りつけ、切腹してから半年が経った。塩冶の御家は断絶、元家老の大星由良之助は京の山科に籠ったが、連日のように祇園町で遊興に耽っている。そんな由良之助に仇討ちの意思があるかを探りに来たのは、以前は由良之助同様、塩冶判官に仕えていた斧九太夫（橘三郎）と、高

師直の家来の鷺坂伴内（吉乃丞）。九太夫は高家に内通し、由良之助の本心を確認しようと床下に身を忍ばせる。廓の夜も更け、座敷の奥から大星由良之助（梅玉）登場、人目がない事を確認めると、最前息子の力弥から届けられた顔世御前からの密書を釣燈籠の明かりの下で読み始める。傍らの二階座敷で酔い醒ましをしていた遊女のおかる（雀右衛門）は、階下の由良之助に気づくと、読んでいる文を恋文と思い込み、手鏡を使って覗き読む。一方、縁の下に潜んでいる九太夫は、垂れてきた文をしたから盗み読む。

由良之助は総てを悟り、大事を知ったおかるを殺そうとするが、その本心を知り、その手で九太夫を殺させ、自死した愛する勘平の代わりに功を立てさせる。その場に居合わせた兄の寺岡平右衛門（又五郎）を仇討の徒党に加えて、仇討の本心を明かすのだった。

恋文を読むふりをして密書を読む大星由良之助、二階座敷のおかる、縁の下の九太夫という三者の構図。勘平への手紙を書く愛らしさと死を知った後のおかるの嘆きと悲しみ。平右衛門との兄妹の情愛。見所満載でした。

コロナ禍の一年間、最大の楽しみは鬼平の吉右衛門でしたのに、17日体調不良で大星由良之助役を突然降板（舞台復帰は25日）となりがっかり、でも代役の梅玉の貫禄のある演技には堪能しました。

今回の歌舞伎公演は1月14日と20日興行をご案内致しましたが、両日で合計20名の会員らびにご家族の方に観劇を頂きました。寂しい観客席を圧倒する舞台上の熱演にご参加の皆様には楽しまれたことと存じます。

（山田 清實・記）